

すべての児童が自分の考えをもち、学び合うことができる授業をめざして ～算数科の授業における主体的・協働的な学びを実現するための手立て～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻
本庄 優生

1. はじめに

A小学校では低学年国語科、高学年社会科を中心に授業研究に取り組んできた。「社会参画できる子どもの育成」を目指して中学年以上では、社会事象を自分ごととして捉えられるよう授業研究を行っている。

授業研究を進める中で、教科横断的な視点に立った資質・能力の育成も目指している。国語科では話型を整え、根拠を基に自分の考えが述べられるように教師がモデルをみせ、児童同士がペアで話し合う授業を行っている。社会科では1時間ごとに児童の思考の流れに沿った資料を提示し、児童同士が考えを共有して深められるように話し合いを大切に授業を進めている。また、児童が毎回授業の振り返りをするように時間を設定している。しかし、考えを言葉や文で表現できない児童や、他の児童の考えを取り入れられない児童もいる。

このようなことから、教科横断的な資質・能力の育成を目指した授業を国語科・社会科以外でも実践していくことが必要であると考えた。そこで、A小学校の研究の柱を基盤に算数科で、どの子ども考えをもち学びを実感できることをめざして実践していくことにした。

2. 研究の目的

答えが決まっていると考えがちな算数科でも自分の考えをもち協働的に学ぶことは重要である。そのため算数科においてどの子ども自分の考えをもち、主体的に学び、お互いに考えを交流し協働的に学び合うことで、子どもが自信をもって自分の考えを言い合いながら生き生きと学ぶ姿を実現するためには何を工夫していく必要があるのかを明らかにしたい。

授業の中で「Ⅰ問題の工夫」「Ⅱ学び合いの場の設定」「Ⅲ振り返りの時間の確保」を取り入れた授業を行い、その中で子どもがどのように変化していくのかをみとる。

3. 研究方法および評価

単元を構想するために取り組んだことは以下の3点で

ある。

- ①実態把握と意識調査をするため授業前アンケートと授業前テストを行う。
- ②単元を通して付けたい力を明確にする。
- ③前時で行った「Ⅲ振り返り」を次の授業に生かす。

そしてこの3視点を基に課題の解決をPDCAサイクル(久野 2016)で研究していく。循環型で考えることにより1授業で終わらず、常に改善しながら学ぶことができると考える。つまり「授業」を中心に、「児童の実態把握」「授業準備」「振り返り」「補足の手立て」というPDCAサイクルで研究していきたい。

児童の実態把握については前学年までの単元で身に付いていなければならない資質・能力についての授業前テストを行うことで、どの子ども考えをもち学びを実感できるよう授業改善をしていく。また学習に対する意識・意欲についても授業前アンケートを取る。学習への興味・関心が高くなるのはどんな時か、何が学習の壁になっているのか等々を把握し、学習への意識・意欲向上につなげたい。

4. 結果と考察

正解なのか、間違いなのか不安に思い発言しにくいという児童に対して、答えを先に提示しなぜこのような答えになるのか考えようとしたり、自由に拡大図・縮図の書き方を考えるようにしたりと工夫した。その結果、活発に意見交換できるようになり理解が深まったことが示唆された。

5. 参考文献

- ・「平成30年度 公開授業研究会 研究紀要・指導案集」A小学校
- ・「授業のユニバーサルデザイン Vol.8」桂聖・小貫悟・日本授業UD学会
- ・「授業のユニバーサルデザイン Vol.9」桂聖・石塚謙二・廣瀬
- ・「全員参加」授業のつくり方「10の原則」田中博史・桂聖
- ・「ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり」高槻市立五領小学校